

トヨタ財団
広報誌[ジョイント]
October 2025

No.49 【特集】LIFE：まもる／守る／護る
地域をまもる

わたしたちにとって真に豊かな暮らしとは何か。何を「まもる」べきなのか。本号特集では、実際に地域の自然と文化に触れることで見えてくる「持続すること」の意味を探ります。



計

算機に満たされた世界は静かに相を変える。技術は外側の道具をやめ、空気や水と同じスケールで環境として呼吸しはじめた。私はこれを「計算機自然」と呼ぶ。ここでは人間は中心ではない、風や菌や機械やアルゴリズムと並列に編み込まれた一つの作用素であり、主語は縮退し、関係だけが立ち上がる。「人がテクノロジーを使う」から「世界そのものが計算している」への反転、それが脱人間中心である。

脱人間中心に立てば世界はあわいに浮かぶ計算機自然の自由な揺籠だ。自由な揺籠のイメージの中さまざまな研究や作品を作ってきた。映像と物質の境界について考えるうちにホログラムや質量への憧憬の探究、身体と計算機について考えるうちに障害とAIで向かい合うxDiversityの研究など物語は続いている。

AIの能力が上がっていく今、改めて記号と物語について考える。計算機自然、記号に支配された人間同士の違いを経て、人間が記号や物語をいかにして手放してヌル(プログラミング用語で何もないという値)に戻るか。大阪関西万博で落合館Null(ヌルヌル)が発信しているメッセージだ。文明は計算機自然に移行し、人間の手を離れて進みつつある。そんな時代を象徴する計算機自然のモニメント建築として、外装は変形する鏡の彫刻建築、内装は自己の変容

私が研究プロジェクトや作品プロジェクトを始めるとき、その裏には毎回パーソナルな物語がある。しかし大体は直感で始まり、直感を物語が補強していく。物語を始める私はヌルに近い。私の機能は身体性と直感を活かしたレコード針のようなものである。閃きに物語をつける作業は今や自分のポートフォリオが勝手に自発的に計算機自然の中で作り上げていく作業に近づいている。その軽やかな関係性をnullの中では「賢さはヒトのちよつとしたおまけ」と表現しているのだが、そういった身体性や偶発性に起因するものが計算機自然で重要になっていくと考えている。

計算機に 満たされた世界は 静かに相を変える

メディアアーティスト

落合陽一



を促す空間として計画された。メディアアーティストの自分のシグネチャーパビリオン、パーソナルな大規模作品として建築・ロボティクス・映像が合わさった空間として実装されていた。

シグネチャーパビリオンは70年万博というテーマ館。太陽の塔と同じ位置付けであるが、今回は自分を入れて8人のプロデューサーがいて、それぞれの館を作るようになった。全八館の中で一番パーソナルなものを作っていると思う。昔、岡本太郎が太陽の塔を作ったとき『国のカネと広場を使って、なんであまりにも岡本太郎的なものを作るんだ』という旨の批判をされた際に、『何を言ってるんだ、個性的なものの方が普遍性を持つんだ』とやり返したといわれている。これは出自が不明なエピソードではあるが、晩年の岡本太郎のインタビューや岡本敏子のインタビューから見ても、お

そらく同様の旨の発言があったのだと思われる。記号の主体を手放しつつある人類のパーソナルな物語とはなんなんだろうと日々私は考え続けている。パーソナルな物語を手放して、物語それ自体は集合知の向こうに保存されていく。物語は勝手に転がっていくこともあるけれど、枝分かれすることもあるかもしれない。身体性が吹き込まれて創発することもあるかもしれない。

物語は機械が語り、我々は閃いたり歌ったりする。パーソナルなことは勝手に紡がれていく。レコード盤は計算機自然そのもので、人はカッティングマシンで且つレコード針である。即今を奏でる楽器のようなものなのかもしれない。

●落合陽一(おちあい・よういち) メディアアーティスト。1987年生まれ、2010年ごろより作家活動を始める。境界領域における物化や変換、質量への憧憬をモチーフに作品を展開。筑波大学准教授、2025年日本国際博覧会(大阪・関西万博)テーマ事業プロデューサー。写真集「質量への憧憬」(amana・2019)「NFT 作唱」(Re-Digitalization of Waves Foundation・2021)がある。

JOINT

October 2025
No.49



Photo by Michiru Sasagawa

愛知県東栄町をめぐる自転車ツアーの途上で。9月初旬の暑い日で、山並みと青い空、生い茂る緑が郷愁と同時にアジアの風を運んでくるようでした。町の皆さんとは、助成対象プロジェクトの活動でベトナムに同行して以来の再会。当時日越のメンバーがすぐに意気投合していたのも納得で、そのままトンネルを抜けてきたのかも?!と錯覚しそうな既視感がありました。

CONTENTS

FIRST WORD ● 落合陽一
計算機に満たされた世界は静かに相を変える 2

【特集】LIFE: まもる／守る／護る
地域をまもる～持続可能な社会を次代につなぐ

助成対象者鼎談 楠瀬慶太 × 島田由香 × 鈴木 瞳

育てる、つなぐ、続けるが「まもる」こと 4

私たちの取り組み——助成対象者からの寄稿
国内助成プログラム ● 齋藤佳太郎
地域の未活用資産である軒先フルーツを活用した、 12
新しい「自治の姿」を創る

研究助成プログラム ● 那須識徳
傷病後の運転中断者に対する地域社会参加支援の構築に向けて 14

国際助成プログラム ● キハラハント 愛
「人権」の枠を超えて拡大した、人を守るネットワーク 16

国内助成・研究助成・国際助成プログラム
2025年度プロジェクト一覧 18

活動地へおじゃまします！〈台南市を訪ねて〉● 冲山尚美
近現代建築物の「記憶」を保存し未来につなげる 22

トヨタ財団×東京大学未来ビジョン研究センター(IFI) ● 山木亜由美
協働事業プログラム「つながりがデザインする未来の社会システム」 25

「私」のまなざし ● 若林魁人
ひまわり畑の写真の外側について 26

BOOK REVIEW ● 太田和彦
風土概念を見直し地球の未来像を探る 28

トヨタ財団ジャーナル 29

育てる、つなぐ、続けるが「まもる」こと

Suzuki Hitomi

鈴木 瞳

Kusunose Keita

楠瀬慶太

Shimada Yuka

島田由香



鼎談場所：体験型ゲストハウス danon

ファシリテーター ● 加藤慶子(プログラムオフィサー)

島田 今日おじゃましている東栄町は私にとっては初めての場所です。700年も続くお祭りがあるなんて、本当に素晴らしいところだと思いました。しかも、それがいくつもの集落で行われていて、メインの鬼のお面がそれぞれ違っていると聞き、それはすごい多様性です。鬼のお面を見たらどの集落のものか子どもたちが見分けられるというのにも面白いです。そうやって自分たちの地域に自覚と自信を持つことは、シビックプライドにもつながっているのだらうなと思います。

半日だけの訪問でしたが、東栄町に対してもっと知りたいという気持ちが芽生えました。これがよかった、あれがよかった、これ面白そうというのは持ち帰って自分の仲間たちに伝えることができるので、こうやって実際に赴くことの重要性を改めて感じました。

特に自転車はすごく良かった！いつも地域にいと車の運転ばかりなので、だからこそ歩くことを大事にしています。歩いていると、車だとさっと通り過ぎてしまつて気づけないところにも気づけますから。でも自転車だとそれができるだけでなく、その土地の風を感じながら気持ちよく移動ができると思ったので、うちの地域も自転車を取り入れてみようかな。ここでやられていることはとても参考になるものも多くて、本当に素敵なお話だなと感じました。

事前に鈴木さんから、ベトナムとの相互の学びあいの取り組みについて教えてもらいました。多分直感で東栄町とベトナムをつなげたんじゃないかなと思うのですが、私は直感

2025年度の特集テーマは「LIFE：まもる／守る／護る」です。第2回となる今回は、「地域をまもる～持続可能な社会を次代につなぐ」と題し、地域づくりに挑む3名の方にお集まりいただきました。お話を伺ったのは、「国際助成プログラム」の鈴木瞳さん、「国内助成プログラム」の島田由香さん、そして特定課題「先端技術と共創する新たな人間社会」の楠瀬慶太さん。それぞれ「観光まちづくり」「防災ワークショップ」「文化資源のデジタルプラットフォーム化」といった異なるアプローチで、地域に根ざした活動を展開されています。

また今回は、鈴木さんのプロジェクトのフィールドである愛知県東栄町で開催しました。東栄町は愛知県の北東部に位置し、人口約2,700人、山々に囲まれ、四季折々の風景が美しい自然豊かな町です。ここでは、経済振興ではなく、地域力の向上を目指し、地域資源を活かした「観光まちづくり」に取り組まれており、鈴木さんはその一環として、ベトナムとの国際交流プロジェクトを実施されました。

当日は、この3名に東栄町にお越しいただきました。地元の食材を使った昼食をいただいた後は、自転車で約2時間の視察ツアーへ。残暑の厳しい9月初旬の午後、古くから町の人々が大切にしてきた神社や廃校となった校舎、壮大な田園や清らかな溪流などを巡りました。700年続く伝統の「花祭」や、地元のヒーロー的存在の「鬼」の話などもお聞きし、東栄町の魅力を肌で感じることができました。

視察ツアー後の鼎談では、地域資源や伝統、文化などをまもり、育みながら、誰もが安心して豊かに暮らせる地域社会を築き、それを次の世代につないでいく、そうした持続可能な地域づくりのあり方について、それぞれの視点から語っていただきました。その後も、プロジェクト関係者や地域の方々とともに話は尽きることがなく、濃密で充実した一日となりました。

ここではその鼎談の様子をお届けします。

【特集】

LIFE

まもる／守る／護る

地域をまもる

持続可能な社会を次代につなぐ





●鈴木 瞳(すずき・ひとみ)
2023年度 国際助成プログラム『「地域力」向上に向けた観光まちづくり』の相互学習と経験共有～愛知県東栄町とクアンナム省ナムザン郡の取組より～代表者

していただいたのですが、かなりディープに地域のことを説明されて、いいところを私たちに伝わりやすいように教えてくださって、そのおかげもあったのかなとも思っています。

楠瀬 僕も東栄町を平日まわらせてもらって、すごくいいところに来たなと思いました。僕は高知県に生まれました。僕は高知県に生まれ育って山村社会について20年ぐらい勉強してきた、今は地域の文化資源をまもるための活動をしています。その活動をするきっかけになったのは、24歳のときに山村に行ったということがすごく大きいです。「限界集落」という言葉を聞いたことがありますが、その言葉は高知の山村の現状をもとに提起された言葉なのです。

限界集落と聞くとどちらかというとマイナスイメージを抱かれると思うのですが、高知県の山村社会を実際に歩いてみて、いろんな調査をしてみたら全然違いました。大正末期から昭和初期の山村社会は衰退している山村じゃなくて、人がどんどん来て、山で採れた材木を搬出して京都や大阪などの都市民の暮らしを支えていた。しかもありとあらゆるものが資源として売れて、その所得は決して高いとはいえなくても、山村が都市を支えるというものでした。その事実を知って、山村に対するイメージがすごく変わりました。山村って人が少ない、子どもも少ない、ジリ貧

だと思っていましたが、その反面ポテンシャルはすごく高いなと感じたんです。
今日まわったところの端々にもそう感じられるものがたくさんありました。たとえば頭首工(取水施設)だって、この水が平野部の人たちを支えているわけですよね。福岡で調査をしたときに、山の人が平地の人たちが米を持つていくことを知りました。なぜかという、山には水源があるから。水源って社会の中ですごく重要で、山の人たちが実は都市や平野部の人たちを支えていた。そんなふうにお互いが支え合うという関係性があつたのですが、それが近代のエネルギー革命によって山の資源が必要なくなり、関係性が切れてしまいました。そんな支え合う関係の端緒が東栄町にはあつてすごく面白いなと思いました。

また、今回びっくりしたことの一つは、畳屋さんや鉄工所など、地域の産業がまだ生きているということ。そうやって村が栄えてきたんだなというのをすごく感じました。あと、自転車ツアーの最後、ガイドしてくれた堀尾さんが、ここに到着する直前の道の風景がすごく好きだったという話をしていました、やっぱり景観って地域の魅力だと思うんですよね。今日いろんなところをまわってみて、それぞれ違う景観の魅力があるなあと感じました。景観とは歴史的な文脈だけではなくて、家、田畑、山道など、そういう人為的なものも含めた全体の景観の魅力というものもこの地域の特徴じゃないかなとすごく感じました。

地域をどうやって「まもる」のか

——今日のテーマは「地域をまもる」です。まもるのは地域の中の人たちだけではできないし、外の人たちだけでも、もちろんできない。みんなが力を合わせながら、そこには根底に好きだとか、面白いとか、そういうちよつとずつの共感や楽しみや生きがいがあるかもしれない。そういうものがつながり合っていくと自然に「まもる」という形に結果としてなっていく。

そして、その中でこれはやめてもいいよねっていう変化もまた、それはそれでありだと思うし、時代とともに形を変えながらつながっていくことが、まもることにつながるかもしれない。「私がこれをまもるんだ！」ってそんなことを強く思ってる人はそれほどなくて、でも皆さんの関わりが結果として、その地域をまもることにつながっているんじゃないかなと思います。

島田 「まもる」って聞くと、そんなことをしているつもりはなくても、長い目で見ると、今やっていることは確かに「まもる」ことにつながるのかもしれない。実際に何かをまもろうと思つて活動しているというよりは、このままではもつたないなあという気持ちから動いていることの方が多いように思います。東京にも、いわゆる田舎とか地方と呼ばれるところにも、それぞれ持っているもの、いっぱいあるし、持っていないものもある。それをつなげられるのは人の移動だと思うっています。

私は東京で生まれ育ったのですが、地域にはこれは東京にないなというものが本当にふんだんにあるなと思ったときに、行く場所や機会を増やしていく、つないでいくようなことをしていたら、それが結果として、たとえば防災であれば、人とのつながりがネットワークになっていって、結果としてまもるということにつながっているのだと思います。地域の魅力って、外側の人にしか分からないことが多いというのはよくありますよね。地域の人にとっては当たり前だけど、でもすごく大事にしているもの・ことを、外部の人にすごい！これ素敵！と言ってもらえることで、それをまもって次の世代に継承していくのが非常に大切だと地域の人たちも感じたときに、その価値に気づいた外側からもやれることがあるかもしれないと思います。

鈴木 私は生まれが鹿児島なのですが、鹿児島の中でも、離れた後も、ずっと転々として生きてきて、自分の地元がないわけではないけれども、どの地域でも外部者として関わってきたところが多いなと振り返って思うなかで、「まもる」という言葉をどこから発するのか、その地域の人から発するのか、外から発するのか、どういう立場なのかはすごく難しいなと感じています。

私のバックグラウンドを話しておいた方がいいかなと思うことが大きくいうと2つ



●島田由香(しまだ・ゆか)
2024年度 国内助成プログラム「地域内外の交流を通じたコミュニティレジリエンス向上による自治型社会の実現」(代表者：石川淳哉)

あつて、もともとの出発点が今回のプロジェクトに関わるきっかけにもなったかなと考えるんですけど、初めに勤めたのが旅行会社だったんです。ですから地域との関わりという点でいうと今やっているような地域づくりではなくて、観光から入りました。観光が地域を元気にする、豊かにするという側面がある一方で、どちらかというと、私は地域を搾取してしまうとか消費してしまうとか、そういった側面に現場を通じて対面することが多かったように思います。私のいた鹿児島では、観光業に従事している人が比較的多いのですが、非正規の方が多かったり、お給料がよいわけでもない。そういうなかで、観光ってなんだろ、誰のための観光なのかという問いを抱いたことが、私の活動の原点になっています。

もう1つは学術的な背景ですが、私は社会学を専門でやっていました。たまたま楠瀬さんと同じ九州大学の人文系で、ソーシャル



● 楠瀬慶太(くすのせ・けいた)
2022年度 特定課題先端技術と共創する新たな人間社会「デジタルプラットフォームによる地域の文化資源継承支援モデルの構築—市民参加型GISの実践活動を通して—」代表者

キャピタルが専門の先生の下で強く影響を受けました。地域を動かすといったときに、お金や制度みたいなものも、もちろん地域を支える原点としてあると思うんですけど、それよりはそこに暮らす人みんなの関係性だったり、信頼を重ねていって蓄積される力だったり、そういったところが間違いなく地域の原動力になっていると学んだことが、私のもうひとつのバックグラウンドになっています。

長い間ひとつの地域で暮らしている人々がすごく羨ましくて。すごく誇りを持っているのに特別自慢することもない様子なんかは、私からするとすごくもったいなく感じてしまう。そんな妬ましきみたいなものが私の原点にあり、原動力になっているのかなと思うのです。

ですから、地域をまもると考えたときに、私自身は正直ずっと迷っていたところがありました。それは外の人がどこまで地域をまもることに関与できるのかということです。結

トを通じて、そのキーワードは「共感」だったのかなと思っています。

今回は観光まちづくりが共感のテーマになっていますが、共感を引き出すのって、すごく時間がかかるんです。丁寧に地域の声を聞いていき、みんながピンとくるのはどの辺なのかを探りながら、島田さんの直感の話じゃないけれども、この辺かなと思うところを攻めていくとか。それは難しいけれども必要だろうと感じているところです。私たちがやっている行政計画をつくるような場面では十分にはできないこともあるんですけど、丁寧にみんなの声を聞いていきたいなと思います。

また、私たちは「まもる」だけではなくて「育てる」ということも同時にやっています。



暑さの残る晩夏の東栄町を自転車で見え回りました。

局は外の人である私がどこまで自分の考えや哲学を持ち込んでいいのか。もちろん長く付き合っていきたいとは思いますが、あくまで私はその地域に責任を負っていないという立場で、どこまで踏み込んでいいのか、すごく迷いながらやっているところです。けれども、今回のプロジェクトを通じて、外の人間だからこそ何かしら果たせる役割があるのではないかと思えるようになりました。外部の視点で地域の良さを発見し、共感してくれる人を増やしていく。そうした関わりも「まもる」ことにつながるのではないかと感じています。

自ら立つこと、自ら律すること

楠瀬 僕は歴史学という自分が学んできた学問で地域を支援することを行っています。主人公は僕じゃなくて、地域の人たちです。大事にしているのは、法政大学名誉教授の岡崎昌之先生に教えてもらった「地域づくりの基本は自ら立つことと自ら律すること」という言葉です。こちらがリードして地域の人にやってもらうのが地域づくりじゃなくて、地域の人たちが自ら立つて、自ら律して考えて動かないといけない。行政や外部団体がやってあげる地域づくりが多いですが、それでは

地域の人たちだけじゃなくて、外の人や視点の借りながら育てているというのをすごく感じていて。だからベトナムに行った際にアイデンティティーや伝統とは何かといった話も出ました。何をもって伝統文化とするのかという議論もみんなでしたんですけど、それって当事者たちだけで決めるのではなくて、これまで残してきたものを、外の人たちに見てもらいながら決めていくのがよいのかなと。

たとえば、少数民族の人たちがかまどで薪をくべて煮炊きをしていたら伝統かもしれないけれど、電気やガスで炊いていたらそれはもう伝統的な暮らしを営んでいるとは言えないのか。多分そうじゃなくて、それも含めて私は伝統、今の暮らしだと思っています。自分たちがやっている伝統のやり方がすごく素敵だなんて外の人にも思ってもらえたという気づきを得て、じゃあ、これを一部伝統として、あるいは自分たちの神聖なものとして残していくとか、そういう判断をして折り合いをつけながらやっていくものではないか。それと同じようなことが、今の東栄町でも起きていると思っています。

花祭にしても旧来のやり方だったら、夜に始まって朝までやって、女性は参加したらいけないとか、いろんなルールがあったと思いますが、それを柔軟に適応力を持つて変えながら、なおかつ外の人の「いいね」とか、こういうふうにしたらといったような提案も取り入れながら、柔軟に変えていく。そのあたりがまもるというよりは、一緒に育てていく、

継続的なものにはならないと思います。

文化資源を調査して記録するのは、普通は学者が行うのですが、僕は市民科学という方法をとって、研究者と地域の人と一緒に記録する。記録を通して気づくということがあるですよ。だから、研究者だけが「すごいね」って気づいた方がいいのではなくて、地域の人が「すごいね」「残したいね」と気づかないと行動に移れない。一緒に調べることで地域の人たちにも気づきがあって、その中で自ら立ち、自ら律するものになっていったら、それがまもるということにつながると思います。

そういう学問をやってきたので、多くの人が感じる価値の基準を、学問として示していくべきではないかと思っています。その辺りは大学で学んだというより地域の人に教えてもらったことの方が大きい。地域で教えてもらったものを形にして伝えていきたいという思いを強く持っています。

鈴木 楠瀬さんのおっしゃることにすごく共感します。私は地域問題研究所で働いていて、行政計画をつくる業務などを行いますが、地域をまもるというに関わっています。計画をつくって終わりじゃダメだし、計画づくりにおいても、形だけのワークショップみたいなのをやってもダメで、結局は、そのプロセスで「誰がどんな思いで自発的かつ自律的に関わるか」、そこから初めて動きが生まれるのだと強く感じています。では、その自律的な気持ちは何がきっかけになって動き出すのかなという、私たちは今回のプロジェクト

続けていく秘訣のなかと、いろんな活動を見させてもらって感じました。

地域の人々の暮らしを大事にする

楠瀬 民俗は変容して今に至っているわけなので、今あるものは変わったからこそ残ってきたと思うんですよ。変わらなかったからなくなってしまうことってたくさんあったはずなんです。僕は16年間新聞記者をやってきて、何度もそういう場面に出遭いました。

男性しかやれない祭りに女性を入れたくない、だから引き継げる男性がいなくなった集落は祭りをやめる。それも1つの選択です。でも、うちの集落はやめることを神様は喜ばないかもしれないから、女性を入れて残そう、と変えて残してきた。それぞれの選択があつて、それぞれの今の形になっていると思うので、なんとか伝えていこうという思いがあれば、残っていくものも確実にありますね。

民俗の観光化には問題があると言われるますが、地域のお祭りであれば地域の人たちの考えを尊重しつつ、違う形に変えながらやっていくというのはあっていいんじゃないか。そうしないと多分残っていけないし、その経緯を知ってもらふことの面白さもあると思うので。たとえば神楽などは長いので、観光的に見せるとしたらちょっと短くしないといけないといったようなことですね。そういった意味での観光の難しさはあるだろうとは思いますが。

島田 ちょっと話が変わるかもしれませんが

が、私には「まもる」というよりは「続く」とか、「つなぐ」ということの方がしっくりくる気がします。地域のことをやっていてすごく大事にしているのは、関わる人全員に私たちは「お客さん」じゃありませんっていうことを先に徹底的に伝えることと、必ず赴いて身体で感じる、身体知と呼んでいるものを大事にしてほしいということ。だから、言葉で説明するというより、歩くとか、香るとか五感で感じることをしたうえで過ごすということ。

あと関わり続けてもらうということは一回の訪問だけで終わらないということなのですが、まず一回は実際に来てもらわない限り次はありません。だから次があつてそのあとも関わり続けてもらうには、一回目の体験をどうデザインするかというところに鍵があると考えています。そのことが次につながるとか続くとか、結果としてまもることになるのかなど。だから、お二人がおっしゃっていることはすべて、本当にその通りだと思います。

楽しいとか、面白いと思う要素があるから続いてきた。それは体験しない限りわからない。だとしたら、じゃあやってみようかなっていう人をどれぐらいつくることができるのか。つまりは暮らしや営みに興味を持つ人なるべく多くつくり、それを続けていく地元の方たちが楽しんでいたらおのずと続いていく。地域のことは活性化しようと思つてやることではなくて、その「結果」として自然に起こることだという感覚を持つて関わつてほしいなと。それが結構大事なんじゃないかな。

あと地域の方たちの暮らしを邪魔しない、

どういうものなのかを伝えていけるといいなと思つています。

＊

——最後に一言ずつ、本日の感想をお願いします。

島田 「まもる」というキーワード設定があつたので、いろんな話が聞けてすごく良かったと思います。まもることは何かを大切にすることです。連続なんじゃないかな。東栄町でも、外の人が関わってくれたことで楽しくなったというのは絶対にあるはず。そうじゃないと元々の住民の方が受け入れるようにはならないですね。そしてそこからまた渦ができてくるみたいな……。そんな楽しいことのすべてを総称するとポジティブ感情と言われるものになっていく。それこそウェルビーイングの大事な要素です。



ということを大事にしています。外から人が来るからこうしてくださいというのではなく、毎日の暮らしのリズムの中で、ちよつと見せてもらつていいですか？ ということの継続。だから、暮らしを見せてもいいと思つてもらえるか、暮らしの中に入つていこうと思えるかという、微妙なころあいが一回目かどうかというかというところが大事な。私もいまは少しだけそのつなぎ役になれてきたかもしれないですが、最初はどうかと言つたら、関わりたいと思う何かがあり、それが原動力であつて、この地域を良くしてあげようという気持ちではなかったことを明確に覚えています。私のメッセージとしては、自分が楽しいと思うことをやる。その結果、地域それぞれに必要なことが自ずと起きてくるんじゃないかということかな。

暮らしを大事にすることが本当に重要だと思います。自分の暮らしもだし、相手の暮らしも。初回で響く人は響くし、その時は響かなかつたとしても、何日かあるいは何年か経つた時に思い出すこともあったり、今日のこの経験が、自分が関わつた違う場所で活きるかもしれない、そういうことかなと思います。

私が東京でしているのは、生活であつて暮らしではないと感じます。私は東京生まれ東京育ちで何十年も東京で過ごしてきて、ある日気づいたんです。暮らしという漢字は草冠があつて、日と書く。だから草木に触れて太陽と共にある。この漢字の一番下の日の部分が土になったら墓



江戸時代の東栄町の集落地図を見せていただきました。

になるんですよ。だからその土地に自分の骨身を埋めるのか。自分がその土地の一部なんだって感じられることが何かしらあることが暮らしであるとしたら、私の感覚ではいまの東京にはそれがない。

さつき鈴木さんが言っていた地域の人々が羨ましいという感覚を、私は東京ですごく感じます。自分には田舎がないなあとかよりどころがないなあとか。でもいまは、関わっているみなべ町にそれを少しづつ感じ始めているという状況をもたらしてくれている地域の人にすごく感謝しています。それは受け入れてくださったからこそだし、この感覚をより多くの、東京しか知らない、特に子どもたちに伝えていきたいです。

これをもつと都市部の子どもたちにしてあげたいから、企業研修という形で展開しています。ちゃんと実行できている企業もあるけど、意図せずウォッシュになってしまっているところが多いので、いろいろな実例をもとに、手触り感のある本当の関わりというのは

楠瀬 僕もどちらかというと観光はプラスのイメージというよりは、意外とマイナスのイメージがあつて。観光まちづくりという言葉あまり聞いたことがなかったのですが、今日いろいろ話を聞いていて、観光が町のストリームのきっかけになっていくことが、すごくいいなあと思いました。観光つて観光協会だけがやることではなくて、本当は地域の人たちももつと関わってくれて交流人口が増えていくことがすごく大事だと思います。それは切り口が「食」でも、「まち歩き」でもいいし、「ものづくり」でもいい。いろんな切り口があつていいのです。そういうことを観光協会さんが少しずつ資源を見つけて発掘していつて、そこにお互い共感して、知っているのが自分たちだけではもつたないから他の人にも知ってもらおうみたいな、そういう意識が広がっていくことで、素敵なまちづくりになっていくんじゃないかなと思いました。

一方でどこまでやるのかという難しさはありますよね。ここはどうしても重点地域としてやりたいというのがあつても、公的な団体だとある程度トータルでやらないといけませんので、全体を見ることも必要。観光がうまくいっている面だけではなくて、課題になる部分も一方では見つけていかないと、継続していかないと思いますね。地域づくりを見ていると、10年続いたところってなかなかないですよ。実際、10年やるとエネル

ギーが途絶えてしまいますし、どうしても同じ人間だけでやっているとマンネリ化していくので、外の人に関わってもらう新鮮味は必要かなと思います。今回そういう作用が起きている瞬間も見られたなあ、すごく勉強になりました。ありがとうございました。

鈴木 助成プロジェクトは孤独を感じながら始めました。本当にやりたいという思いはあるけれど、私は外の人だし、どこまでやっていいのかなとか、観光まちづくり協会さんとはとも少ない人数でやっているなかで余計に仕事を持つていくのは私のエゴですよ。そういう想いを抱えながら助成金をいただいてやってきましたが、私たちが掲げた地域力の向上、その学びが深まったというののもあつて、今回やつてよかったなとすごく思うのは、迷いながら関わっている今の私のやり方が間違つてないと思えるような、同じ方向を目指している方に出会うことができて、私だけが思い悩んでいるわけじゃないのを知ることができたことです。

島田さんがされているのは内と外との人の交流を生み出すようなスキームで、楠瀬さんは市民の方の力を借り、それを主体にして場をつくるやり方を構築されていらつしやるというお話を聞いて、いろんなやり方があることを学べてすごく勉強になりました。今はあまり孤独感を覚えることはなくて、みんなで明るい気持ちでもつと楽しいことやつていく、今やつてることにもう少しみんなで突き進んでいくとか、そう感じられたことが、私にとつての大きな成果だと思います。

私たちの取り組み——助成対象者からの寄稿

今号は国内助成プログラムから齋藤佳太郎さん、研究助成プログラムから那須識徳さん、国際助成プログラムからキハラハント愛さんにご寄稿いただきました。



2023年度国内助成プログラム
「助成題目」湘南のきさきフルーツプロジェクト——お庭の未活用果樹を使った地域の新しいつながり創出

地域の未活用資産である軒先フルーツを活用した、新しい「自治の姿」を創る

●齋藤佳太郎（湘南のきさきフルーツプロジェクトプロジェクトリーダー）

プロジェクトのきっかけと湘南というエリア

私たちが活動する神奈川県茅ヶ崎市・藤沢市を中心とした湘南エリアは、海や山など自然が多く住みやすい環境でありながら、都内へのアクセスもよい地域です。そのため、移住者も多く人口増加傾向にありますが、実は他の地域と同じように、

- ・世代間のつながり
 - ・移住者と地元在住者のつながり
 - ・移住者とお店や自治会との関係
 - ・移住者と行政のつながり
- といった「地域のつながりの希薄化」が徐々に進み、地域にさまざまな影響を与えていると感じています。

まちのことを深く知ること、それぞれの興味関心・問題意識から「新しいプロジェクト」が生まれる協力体制も作っています。

個人の想いと物語から生まれるものを育てる

活動は、地域で暮らす多くの人が参加しやすいよう、誰にとっても欠かせない「食」という入り口に「楽しそう・おいしそう」というシンプルな参加動機と、それぞれの頻度や距離感でかかわれる敷居の低さ、また、さまざまな世代や趣味嗜好が多様化している現代の人々であっても、幅広いかわりしろの中から参加動機を見出すことができるように設計しています。

そして、その中で自然に生まれてきた、一

人ひとりの想いと物語を大切にして進めています。



商品化を提案した二人(右)と、完成した「喜代のはっさくシロップ」

一例として、あるプロジェクトメンバーは、亡くなったおばあちゃんの家になっている、はっさく・ゆず・みかんを腐らせたくないとこの想いで以前から商品化を考えてい

このプロジェクトのきっかけは、湘南への移住者でもある私たちが、ご近所のお庭になっている果樹を見て「あれ、食べたいな」と思ったのと同時に、食べられずに落ちて腐ってしまっていることが多い現状をみて「もったいない」と感じたことです。

湘南エリアには、昔から庭先に果樹を植えている個人宅が多いという特徴があるので、その果実（のきさきフルーツ）が収穫できずに「放置されている」状態を地域のつながりの希薄化が目に見えるかたちになったものと考えました。

湘南のきさきフルーツプロジェクト

この活動は、単に未活用のフルーツを循環させるだけではありません。

たそうですが、自分だけでやるのは難しいと感じていたタイミングで一年前に当活動に参加してくれました。そこから一緒に1年かけてクラフトシロップ「喜代のはっさくシロップ」（プロジェクトメンバーのおばあちゃんの名前から命名）という初の独自商品を作成しました。おばあちゃんへの想いを具現化した商品となりました。

また、教育機関との取り組みも広がってきました。小学校では先生と生徒たちのアイデアから発展し、通学路の果樹のあるお宅に伺って自分たちでフルーツをもらう交渉をし、いただいたフルーツで作ったジャムを商店街で地域住民に食べてもらい、商店街を盛り上げる活動となりました。

他にも、プロジェクトメンバーそれぞれの活動（お店・スペース・事業）とのコラボや協力関係、それぞれの興味関心ことから生まれるフルーツの有効活用が実現しており、ホスピスでの蒸留会や、フードパントリー・フリースクール・こども食堂への提供など人とのつながりを通じた新しい展開も増え始めています。

これからも社会から求められることや効率のような「外側」から考えるのではなく、やりたいことや興味関心・大切にしたいことという、自分たちの「内側」から生まれたものを丁寧に着ていきたいと思っています。

プロジェクトの考える新しい自治の姿

フルーツをきっかけに地域の人々が集い、おいしく楽しい体験を共有し、その中で自然



プロジェクトのイベント時に行った交流会

結果として多様な地域課題の解決の糸口になると考えています。

具体的には、お庭に果樹がある果樹オーナーさんに収穫の機会をいただいたら、「収穫」チームが現地に伺い収穫、分けていただいたフルーツを活用して「キッチン」チームがさまざまな料理を作ったりワークショップを開催したり、「ブランド」チームと新商品を発案したりしています。

また、地域で暮らす人がこの活動を通して

と人となりを知り合い、一度きりではなくまた出会える——。

そんな機会を季節の果物を通して作り続けることで、参加者各々が日々を暮らす地域の中で「顔の見える特定多数」という関係性・安心感を育て、広がっていくことができる。

私たちは、その広がりと重なりこそが、まちとひとに関心を寄せ、他者との協力や助け合いを成り立たせる要因であると考えています。そんな自然でまろくてやわらかい「新しい自治」をこれからも広げていきたいと思っています。

そして、近年のマンションの増加や庭付き戸建ての減少に伴い、徐々に減少傾向にある湘南らしい果樹のある姿も、未活用フルーツの活用をする姿を見せることで、「湘南らしいまちの風景」として残していきたいと思っています。



収穫した果樹を活用したワークショップ

傷病後の運転中断者に対する地域社会参加支援の構築に向けて

● 那須識徳（農協共済中伊豆リハビリテーションセンター リハビリ作業療法科）



運転を中止することの問題

私が所属する農協共済中伊豆リハビリテーションセンターでは、1973年の開設当初より障害者の自動車運転に携わってきました。当センターでは、運転再開を希望する対象者に対してドライビングシミュレーターや敷地内の実車運転コースを利用し、年間約100名程度の患者様に運転評価を行っています。そのうち約6割程度の方が退院後に運転再開に至っていますが、4割程度の患者様はすぐに運転再開には至らない状況です。

「先生、お父さんが勝手に運転するって言んです。なんとか説得してください」

ある患者様のご家族からの電話でした。多いときには1か月で数回の電話があり、何度も運転評価を行いました。最終的に運転再開には至らず、運転免許の期限が切れて支援が終了しました。

「運転ができないと何にもできない。友達に

も会えないし釣りにも行けない」

支援終了時の面談での患者様の言葉は、今でも強く印象に残っています。

傷病後に自動車運転をやめざるを得ない人々の生活は、想像以上に孤立しているのかもしれないません。自宅から病院へ、買い物へ、友人との交流へ——その移動が途絶えたとき、人は地域社会とのつながりを失い、生活の質は大きく揺らぐ可能性があります。厚生労働省のデータでは脳卒中の初発は65歳以上で多いとされており、高齢化が進む日本では、こうした問題は今後さらに広がっていくと考えられます。

問題の背景と課題

近年、脳卒中や高次脳機能障害を背景に運転を中断する人が増えています。運転を再開できる割合は3〜6割程度にとどまり、運転の中断を余儀なくされる方も少なくありません。しかし、運転をやめた後の生活設計を支援する仕組みは十分に整っていないのが

セスできる体制を構築しています(図2)。

第三に、代替移動機器の導入です。シニアカーや電動車いす、電動アシスト自転車などの活用を念頭に、病院敷地内に段差や狭路、踏切を模した「モビリティコース」を整備しました(図3)。これにより、公道での危険を回避しつつ、安全な操作方法を学ぶ機会を提供しています。練習の効果や適応疾患を検証することで、シニアカーの評価方法の確立や練習方法の改良を進めていきます。

今後の展望と結び

本プロジェクトの根底には、これまでの研究の積み重ねがあります。代表者らは、後天性脳損傷後の運転中断者と家族の経験を質的研究で統合し、「人—環境—作業」モデルに基づいた支援の枠組みを提示してきました。また、移動手段の変化に関する準備性を評価するARNTを日本語化し(ARNT-J)、信頼性と妥当性を確認しました。支援の枠組みを



図1：教育資料を用いたセッション

現状です。特に地方や山間部では公共交通が乏しく、自家用車の喪失が即、社会参加の制限につながることも少なくありません。就労や買い物、通院、交流といった日常の営みが困難となり、身体的虚弱や心理的抑うつを招く可能性もあります。

さらに、運転中断の経緯にも注目する必要があります。私たちの調査では、自分の意思で運転をやめた人は前向きに生活を再構築できる傾向がある一方、医師や家族の判断で中断を迫られた場合には、生活満足度が著しく低下していました。このことは、運転中止に至るプロセスの中で、自己決定の機会をいかに確保するかという点が非常に重要であることを示しています。

提示して介入方法を明確にし、運転中止までの準備性を高めることが、その後の生活にどのような影響を及ぼすのかを検証することも、本研究の目的の一つです。

今後は、教育プログラムを受講した群と従来支援群を比較し、地域参加やQOLへの効果を検証する予定です。さらに、作成したパンフレットやモビリティコースを利用して検証した知見は他地域や一般病院でも応用できるように、公開講座や研修を通じて社会へ広く普及させていきたいと考えています。

本プロジェクトの目的は、「運転ができなくなっても生活に困らない仕組み」を社会に示すことです。移動の困難さを見える化し、多様な生活の選択肢を提示することで、誰もが前向きに生活を再構築できるよう支援することを目指しています。これらの取り組みは、地域における生活の質の向上と社会参加の促進につながると考えています。

プロジェクトの取り組み

本プロジェクトは、トヨタ財団2023年度研究助成を受けて開始されました。テーマは「傷病後の自動車運転中断者に対しての地域社会参加の支援体制構築」であり、①教育、②情報提供、③代替移動手段の活用という三本柱を中心に展開しています。

第一に、当事者と家族への教育プログラムです。全4回の当事者セッションと1回の家族セッションを設け、「人—作業—環境」モデルや行動変容理論を用いながら、運転中断への準備性を高めることを目的としています(図1)。本人の不安や価値観だけでなく、送迎を担うご家族の心理的・時間的負担にも焦点をあて、対話を通じた納得感の形成を目指しています。

第二に、地域資源の可視化です。医療・介護・福祉・行政に分散した移動サービスは情報が煩雑であり、必要な支援に結びつかないことが少なくありません。そこで、近隣2市1町を対象に公共交通、福祉輸送、地域独自の移動支援を整理したパンフレットを作成し、当事者と家族が必要な情報に容易にアク



図2：伊豆市移動支援ガイド(<https://www.janrc.or.jp/book2/>)



図3：モビリティコースの活用例



「人権」の枠を超えて拡大した、人を守る ネットワーク

「アジアにおけるコロナ対策の民間による人権ベストプラクティス」についての研究・相互学習とネットワーク形成」プロジェクトから

●キハラハント 愛（東京大学大学院総合文化研究科）

多様なアクターとの出会い

2019年末から、コロナ禍の緊急事態の中で、国が人移動を制限し、ワクチンやマスクを提供し、検査の体制を整えたり、各種の支援体制を検討して提供したりする傍ら、国以外のアクターにも人を守る動きが多くあった。2020年に、国連人権高等弁務官事務所からの依頼で、国家以外のアクターがコロナ禍にあつてどのように人権を守るイニシアチブを取ったか、「ベストプラクティス」と言えるような良い事例の情報を集めた。

すると、調べた活動や関わる人たちについて、大変な興味が沸いた。理由の一つは、活動に関わっているのが、通常人権を擁護するアクターとして認識されていないアクターが多かったことである。また、それらの活動は、創造性に富み、地元の素材や人材、ネットワークを使って迅速に取り組まれていることも印

象的だった。より詳しくその体験や成功の秘訣、活動をしている人の考えなどを知って、お互いに教え合つてより大きなネットワークができるのか、というのが、トヨタ財団の国際助成プロジェクト「アジアにおけるコロナ対策の民間による人権ベストプラクティス」についての研究・相互学習とネットワーク形成」の始まりだった。

だから、このプロジェクトには、色々なパートナーがいた。たとえば、インドネシアでコロナ禍中に小学校が閉鎖され、何十キロもバイクで山道を越えて山村に行き、屋外で授業をした先生たちの同志グループは、「子どもたちには勉強を続ける権利がある。子どもが動けないなら先生が動けば良い」と、山村に続けた。

また、あるタイのパートナーは、どこでマスクが手に入るかをウェブサイトでマップにし、皆が無料で閲覧・書き込みができる

係性について、プロジェクトメンバーで学術論文を発表したり、国際人権会議で成果を発表したりなど、学術的な活動もあり、もっと直接お互いに話を聞いて、その内容を公開したく、合計4件のインタビュー記事を公開したりもした。

移民・難民グループでは5回にわたって各テーマに沿ったコンサルティングを行い、そこで要望のあったアドボカシーについてのワークショップも開催することができた。

私が参加した中で特に心に残っているのは、隔離や移動制限などによって人とのコミュニケーションが限られ、脆弱な立場にある人々が孤立しやすい際に、限られた対面・オンラインのコミュニケーションの中で「共感」を生み、育てる重要性と方法について、

マレーシアのTRIBELESSという団体からのスピーカーが話してくれた回である。

学んだことや考えたことは多い。東北の震災後に助産婦さんが始めた出産直後のお母さんたちの自助団体と言える「まんまるママいわて」の佐藤美代子さんの話で印象に残ったのは、彼女たちはまったく「人権」に関わっているという意識がないということだ。また、被災者が多く多様な中で、被害が比較的小さかった被災者は、自分が被災者としてサービスや利益をうけては

ようにして皆の健康の権利を守ることに貢献したが、このパートナーは、ただ自分の技術を使って自由時間に無償でサービスを提供した、一個人である。

シンガポールのパートナー、Migrant Support Coalition (CMSC) は、難民・移民を援助するということについて、国との関係性について多くのことを考慮しながら、国とつかず離れずで活動していた。上智大学に所属する学生が運営している、Sophia Refugee Support Group (SRSF) という難民および庇護希望者の支援グループや、クラウドファンディングで、インドの地域に根ざした活動をする非政府機関(NGO)や慈善事業を財政的に支援した学生グループなども参加した。

共通するテーマによって、シンガポール・日本の移民・難民の人権について、インドネシア・東ティモールの教育の権利について、タイの健康の権利と技術について、フィリピンと日本の人道援助分野について、の4つのグループとなつた。合計200



SRSFが毎月開催する「難民カフェ」で節分のお祝い

以上の個人や団体との関わりがあり、言語の壁、距離の壁、自由時間の壁、コミュニケーションの壁、技術の壁、通信環境の壁、な

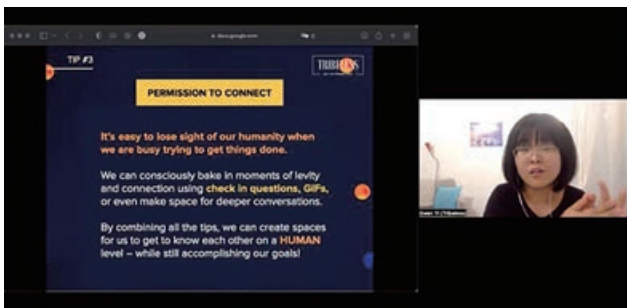
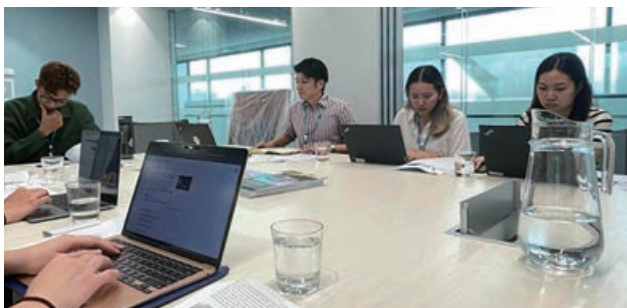
市民社会ネットワークの醸成へ向けて

緊急時に人を守りたいと思うアクター同士のつながりの速さと強さについても、驚くことが多かった。たとえば、タイでは、個人が開発・公開したマスクマップには、ウェブサイトを維持するためのスポンサーが迅速につき、個人に負担が少なくサービスを続けることができた。

また、病院にどれだけ人が並んでいるかという列をモニターするアプリを無償で開発・提供したのは一企業で、政府が素早く連携することにより、そのサービスはより多くの病院の情報をアップデートできる仕組みができ、人々が通院や投薬を記録する健康管理に使うアプリともつながったと言う。

他の例でも、フィリピンでフェイスシールドが必要だった際には、竹で民芸品を作っているワークショップと、職場が閉鎖された技術者たちが素早く連携し、竹を使ってフェイスシールドを作つて人々に提供したりもしている。

プロジェクト期間中にできた人々や団体との関わりは、今後国連人権高等弁務官事務所の市民社会のネットワークの中に形が残るよううにして行く予定だが、このプロジェクトを通じて出会った多くの人や団体と直接的なつながりを維持できるようにしていきたい。



上：国連人権高等弁務官事務所アジア大洋事務所プロジェクト内容を発表。
下：コンサルティングで「共感」について話す、TRIBELESSの代表。

代表者氏名	題 目	助成金額(万円)	活動地域
平賀悦子	大地を歩む小さな足がみらいを耕す～保育と農で築く共助の地域づくり～	480	岩手県
林 篤志	一人ひとりが担い手となった熟議と意思決定を通じた住民自治のモデルづくり	527	奈良県
寺田 光成	ちょこっと参画まちあそびプロジェクト	593	東京都
甲斐友彦	tate.base を拠点とした共創型地域エコシステムの構築	556	熊本県

研究助成プログラム

代表者氏名	題 目	助成金額(万円)
曾我昌史	都市緑地における生態系保全活動を核とした自然共生社会モデルの創出	560
澤野晋之介	人とAIが協働する遠隔医療支援システムによる医療資源共有モデルの構築	650
小方智広	「困りごと」で異分野をつなぐ共創プラットフォームの構築 ―― 統合失調症患者の感情構築と感情文脈のライブラリ化	630
中野円佳	不登校児を対象とした能登復興ボランティア活動プログラムの実施と効果検証	750
前田央昭	教師の越境がもたらす教育現場・教員・社会への波及効果に関する実証研究	640
ユディル・オフィンニ	インドネシアの医薬品による水質汚染が水生生物多様性および島嶼・海洋先住民に与える社会生態学的影響	720
瀬戸山陽子	医療と福祉／当事者と専門職のつながりから共同創造する医療系学生向け教材 ―― 障害のある人の語りから医療を変える	720
今村知彦	子供と死別した遺族と支援をつなぐ社会基盤構築 ―― 遺族・支援者共創によるプッシュ型グリーフケアシステムの開発	750
尾崎章彦	語り・表現が拓く、震災後の持続可能な地域ケア ―― 福島県いわき市北好間地区における住民主体の実践モデル構築と評価	730
近藤孝樹	若者のキャリアと社会の未来をつなぐ「AIとともに生きる」を考える探究型授業の開発	550

国内助成・研究助成・国際助成プログラム

2025年度プロジェクト一覧

2025年度に採択された国内助成プログラム13件、研究助成プログラム10件、国際助成プログラム8件のプロジェクト一覧です。

※掲載内容は2025年9月24日時点の情報です。各プロジェクトの詳細についてはトヨタ財団ウェブサイトをご覧ください。

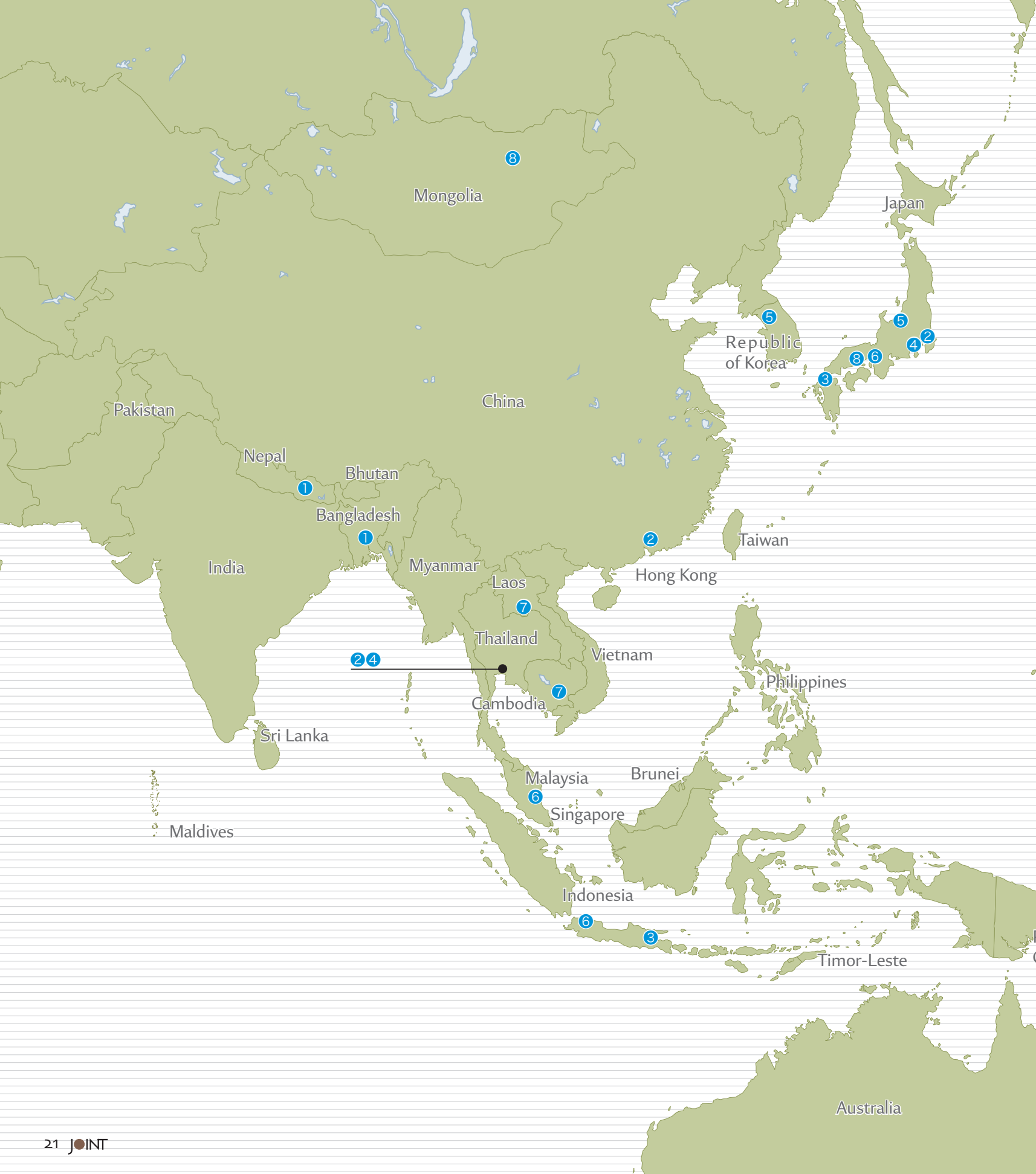
国内助成プログラム

1)日本における自治型社会の一層の推進に寄与するシステムの創出と人材の育成

代表者氏名	題 目	助成金額(万円)
三谷繭子	まちと自分をつなぎなおす～参加からはじまる自治のしくみづくり～	1,500
宝楽陸寛	地域資産を「新しいコモンズ」に変える ――公益信託を活用した自治型社会モデルの構築―	1,500

2)地域における自治を推進するための基盤づくり

代表者氏名	題 目	助成金額(万円)	活動地域
水口 迅	ピアサポートでつながる自治共創：十勝発・地域からはじまる新しい医療社会モデル	570	北海道
橋本淳司	武蔵野市発・雨水からはじまる地域の自治プロジェクト	598	東京都
新井信幸	公営住宅からはじめる新たな地域運営～集会所を活用した居場所づくり等～	374	宮城県
小沼大地	地域共生社会を実現する 地域主体の社会的処方モデルづくり	599	石川県
泉川 時	笠居郷神産学連携まちづくり	600	香川県
中川悠樹	みんなが安心して共に過ごせる佐賀発インクルーシブモデルの構築	528	佐賀県
岡本 誠	ものづくりを原点とし暮らしを創り学び合う共創型自治モデルの構築	591	北海道



2025年度プロジェクト一覧

国際助成プログラム

番号	代表者氏名	題目	助成金額 (万円)	主な活動地域
①	筒井哲朗	気候変動リスク下におけるイネの生産性とレジリエンス（イネ品種に焦点を当てたバングラデシュとネパールの相互知識交換）	1,000	バングラデシュ、ネパール
②	大浜あつ子	アジア運動療育ネットワークの構築：日本・中国・タイの実践交流を通じた発達障がい者支援の質的向上に向けて	1,000	日本、中国、タイ
③	日比野浩平	インドネシアと日本の相互学習による使い捨て紙おむつの実用的リサイクル・モデルの共創	960	インドネシア、日本
④	則竹 淳	超高齢社会への新たな挑戦：日タイ交流による非薬物的認知症予防モデルの構築と実践	1,000	日本、タイ
⑤	山下剛史	日韓の共創による東アジア版自治体ゼロ・ウェイスト評価認証の制度づくり	1,000	日本、韓国
⑥	増野園恵	女性地域リーダーの語りと文化的ケアを軸とした地域防災共創プロジェクト	1,000	日本、マレーシア、インドネシア
⑦	松田菜穂子	カンボジアとラオスにおける授業と教科書の改善を両輪とした小学校算数科授業研究モデルの開発	1,000	カンボジア、ラオス
⑧	井上信明	日本及びモンゴルにおける地域住民の救急医療へのアクセスを確保するための取り組み～資源動員論に基づくシステム変革の実現	986	日本、モンゴル



活動地へおじゃまします！

台湾の古都・台南市を訪ねて

近現代建築物の「記憶」を保存し未来につなげる

◎沖山尚美(プログラムオフィサー)

国立台湾文学館：日本統治時代の1916年に台南州庁として建設され、戦後は台南市庁舎などとして使われたのち、現在は文学博物館として市民に親しまれている。台湾を代表する近現代建築物の活用事例のひとつ。

【訪問地】

台湾・台南市

【プログラム】

2024年度国際助成プログラム

【助成題目】

文化遺産としての近現代建築物の保存活用にもつた学びあいと人的ネットワーク構築

本の関係のさらなる深化と発展を目指すプロジェクトというようになります。

さて、本プロジェクト活動の一環として、2025年7月に日本側から建築学の研究者、建築系事務所、イラストレーターや写真家など、近現代建築物の保存に情熱を傾ける総勢15名のプロジェクトメンバーが台湾南部の歴史ある都市・台南を訪問しました。私もこのワークショップ・視察調査に同行し、プロジェクトメンバーの方々から、現地であればその有意義なお話をお聞きすることができましたので、ここにご報告を兼ね、共有させていただきたいと思います。

文化・歴史の交流の拠点としての近現代建築

この場合の近現代建築物とは、一般的に日本では「明治時代以降（1868年）に建てられた建築物や土木構造物」、台湾では「日本統治時代以降（1895年）に建てられた建築物」のことを指します。そんな近現代建築物には、レンガ造りやアール・デコ様式などの往時を思い起こさせる個性的でレトロな趣のあるデザインのものも多くあります。これらの建造物は、伝統的な神社仏閣や築数百年の古民家などの木造建築物とは異なる材料や工法が用いられているため、それらとは異なる修理や保存の技術が必要となります。補修を繰り返しながら現代社会の中でも実用に供されているものも多いため、所有者や利用者との調整や経済性の検討などが求められるケースが多々あり、

それらの歴史的建造物をいかに保存し活用していくかが社会的課題として問われています。

台湾では、台湾の歴史の独自性やその積み重ねを大切にするという国の方針の一環として古蹟保存に力を入れていて、近現代建築物保存のための施策や制度なども日本よりも進んでいるようです。それには国定、直轄市指定、県(市)指定の三つの分類があり、特に県(市)指定の古蹟は地域の暮らしに根付き、人々に愛されながら活用されています。

国定の近現代建築物の活用事例の代表的なものとして、台北の総督府や中山堂などはよく知られていますが、台南にも多くの近現代建築物があります。台南は1624年のオランダ人到来から清朝統治時代を経て日本統治時代の1895年に台北に首都機能を移転するまでのあいだ、台湾の社会経済文化の中心地として栄えた歴史があり（日本でいう京都のような古都の位置づけだという人もいます）、伝統・文化が色濃く残るまちとして、多くの歴史的建造物や遺跡が存在しています。そしてそれらが現代にまで受け継がれ、建設当時とは使途や目的のまったく異なる施設として多くの人々に利用されています。

今回私たちも訪れることができた、日本統治時代（1895～1945年）に建設された台南州庁を国立台湾文学館として、また台南警察署を台南市美術館として活用しているのはその一例。古蹟は単に過去の記憶の記録だけではなく、現代の市民生活や地域社会における歴史との対話、文化と交流の拠点として重要な役割を担っているのです。



台南市美術館1号館：日本統治時代の警察署をリノベーション。レトロな雰囲気のある美術館として人気を集めている。

さらにいえば、これらの歴史ある建築物は地元の人々だけでなく、国内外の多くのレトロ建築ファンを魅了しています。台湾を訪れる旅行者の中には、これらの歴史と独特な趣のある建築物の鑑賞を目当てに足を運ぶ人も少なくあ

りません。近現代建築物は台湾の観光振興にも一役かっていると言えることができるのです。

過去の記憶を現在と未来につなげる

プロジェクト代表であり、本ワークショップ参加者の一人である京都大学教授・荒木慶一氏によると、台湾に近現代建築物が多く残っている一つの背景として、日本は高度経済成長の時代に多くの建物が取り壊され、建て替えられてしまいましたが、台湾は経済成長期のタイミングが日本よりも遅かったために古い建物を修繕しながら大切に使い続け、その後台湾が経済成長を経験した頃にはそれらの建物は築50年以上が経ち、経年の価値が高まっており、古いからすぐに取り壊したほうがよいというより、まずは保存の対象として検討するという社会状況があったとのことでした。

確かに高度経済成長期の日本は右肩上がりの勢いで、新しいものはいいものだという風潮が高まり、街では常に工事が行われ、昔からあった古い建物は次々と取り壊され、その跡地に新しいビルが建ち並び、街の風景を塗り替えてきた時代でもありました。街は活気に沸いていたかもしれませんが、その陰で長い間大切に使われてきた歴史ある貴重な建物が、ほとんど顧みられることなく取り壊されていったかと思うと、少し残念で寂しいような気がします。翻って、ゆっくりと経済成長を迎えた台湾のほうが、結果的に一度作られた大切なもの（建築物）を残す余地があったといえるのかもしれない。

近現代建築物の保存と活用の社会的なインパクトについて、やはりワークショップ参加者の一人、名古屋大学教授の西澤泰彦氏にお話をうかがってみましたところ、とても端的で腑に落ちるご説明をいただくことができました。

西澤氏によると、近現代建築物を保存し活用することの社会的な意味は、一つは環境を守るというハード面の視点があると言います。古いものを壊して建て直す「スクラップ・アンド・ビルド」は環境負荷が大いだが、古いものを修繕して使い続けることは広い意味で環境保全につながるということです。これは今後ますます注目される指標になるのではないかと思います。

やまき・あゆみ

山木亜由美

東京大学未来ビジョン研究センター特任助教。専門はライフサイクル工学、化学工学。メーカーでの勤務経験もあり現場を踏まえながら、再エネやバイオマスに関してライフサイクルアセスメント(LCA)によるシステム設計を目指す。

〈プロジェクト紹介と抱負〉

持続可能な社会の実現に向けて、再生可能エネルギー（再エネ）の導入拡大と生物由来資源の有効活用をしていく必要があります。従来は、生物由来資源が食料になり、化石資源がエネルギーと化成品を供給するという、シンプルな仕組みになっていました。しかし、持続可能な社会の実現に向け、これからは化石資源に代わり生物由来資源であるバイオマスを含む再エネを最大限に活用し、食料・化成品・エネルギーを統合的に供給する新たな社会システムの構築が必要だと考えています。

新たな社会システムを実現するためには、バイオマスから直接食品や化成品・燃料を生産することに加え、副産物や廃棄物の再資源化、変動性再生可能エネルギー（VRE）の利用を進めていくことが重要です。特にVREの不安定な出力に対しては、蓄電池などの蓄エネルギーによる調整が不可欠ですが、蓄電池にはレアメタルなどの資源が用いられるため、リサイクルの視点も重要です。また、新しい設備ばかりを導入するのではなく、既存インフラもうまく活用したいと考えており、利用可能な再エネやインフラといった地域ごとの特性を活かした社会システムの設計をしていきたいと思っています。

本研究では、具体的な地域やプロセスを対象としたライフサイクルアセスメント(LCA)による環境影響評価を通じて、環境負荷の定量的な把握と、それに基づく持続可能な新たな社会システムを設計していきます。LCAのための計算やシミュレーションをしている時にはパソコン作業が多く机上の空論に陥りがちですが、現場にも足を運び、現場を、地域を変えていける研究者になりたいと思っています。本プロジェクトを通じて、再エネから食料・化成品・エネルギーを供給する新しい社会システムを設計しながら、実際の地域での制度設計や設備導入に貢献したいと考えております。



新たに特任助教が 着任しました！

トヨタ財団×東京大学未来ビジョン研究センター（IFII）



LCAの対象としている現場のキャッサバ(バイオエタノールの原料)と、バイオマス燃料を使用した熱供給設備。

トヨタ財団は東京大学未来ビジョン研究センター（IFII）と協働し、研究助成プログラムのテーマ「つながりがデザインする未来の社会システム」のもと、社会システム変革に向けた研究に取り組む研究者を長期雇用し育成する協働事業プログラムを実施しています。今回は2025年4月に着任した山木さんにメッセージをお寄せいただきました。

協働事業プログラム「つながりがデザインする未来の社会システム」



成功大学：旧日本軍の施設を大学の校舎として再利用（成功大学という名前は、台湾の国民的英雄の一人ともいわれる鄭成功からとったもの）。

計画が見直されることも珍しくないので。そのうえで黄俊銘副教授は、台湾の特殊性のひとつとして、その複雑な歴史の積み重ねを挙げていました。これらの近現代建築物は、清、オランダ、日本の統治を経た社会背景や地域の経験を映し出していると考えられると言えます。そうした「積み重ね」を文化の表現としてだけでなく、社会の

計画が見直されることも珍しくないので。

建築物の保護と活用を通じた社会課題への取り組み

ところで、台湾側メンバーである中原大学・黄俊銘副教授によると、台湾では古い建物は「老人」に譬えられるそうです。老朽化による損傷はありますが、それ以上に多くの記憶や経験、文化が蓄積された存在として、古い建物は敬意をもって扱うべきものとされているのだとか。人々による建築物の保存活動は日本各地でも見ることができますが、台湾でも、古い建物の取り壊しに対して市民が反対運動をおこし、

もう一つは、歴史ある建物をスクラップ・アンド・ビルドすることで地域の人々の記憶や経験もスクラップされてしまうというソフト面の課題です。地域に愛され、日常の一部になっていた建物が取り壊されるのは、その場所にまつわるコミュニティの記憶や経験もスクラップされてしまうということ。記憶の断絶につながるということなのです。



成功大学には1923年に当時皇太子だった昭和天皇が植樹を行ったガジュマルの木が大きく枝を広げている（撮影：菅野耕希氏）。

多様な経験や歴史の蓄積として受け止めているのだと。「古い建物は誰かの所有物であると同時に、地域の記憶であり、社会が共有すべき歴史の一部でもあるのです」という言葉が強く印象に残りました。

振り返って私の住む地域を思い返すと、確かにまちのどこどこに歴史的文化財として指定されている建築物があり、市民の家や文化施設、食事処やイベント会場などとして活用されていて、私も時々利用することがあります。新しい建物の快適さもいいですが、長年使われてきた味わいのある建物に集うとき、どこことなく優しくアットホームな雰囲気やうまれ、初めて会う人にも心を開きやすく、会話がうまれやすい空気感を作ってくれる気がします。

今回の視察に同行させていただいたことは、そんな観点からも、自分の住む地域の近現代建造物の価値を改めて意識するきっかけとなりました。私にとって、現地で「学びあう」ことの意義もそんな認識から始まる気がした、今回の視察の旅となりました。

*

今後、プロジェクトでは2025年11月に台湾の方々を名古屋と京都に迎え、日本の近現代建築物を紹介する予定です。旧名古屋控訴院（1922年竣工、煉瓦造）、豊田佐助邸（1923年、木造）などの建築物を実際に訪れながら対話を深めていきます。学びあいの内容は、写真やイラストを交えた報告としてとりまとめ、広くインターネット等で公開される予定です。近現代建築物の保護と活用を通じた社会課題への取り組みを考える台湾と日本の学びあいと交流が、これからどのように育っていくのか。今後の展開を楽しみにしています。

8 月の半ば頃。私がよく散歩する植物園で、おそらく中高生くらいの何人かがひまわり畑のフォトスポット付近でスマートフォンを立て、ダンスの動画を撮っている様子を見かけました。観光地や娯楽施設、ときには道端で、そういった場面に出会うことにも慣れてきた今日この頃。そんなとき、きつとソーシャルメディアに投稿する動画を撮っているのだろうと想像するのではないだろうか。

しかし研究活動の中で何人かの高校生が私に話してくれて驚いたことは、確かに流行りのダンスを踊る動画を友達と一緒にTikTok(短い動画を作成・投稿するソーシャルメディア)で撮ることはあるけれど、動画を投稿することはない……という彼女らの実体験でした。もちろん植物園で見かけた人々がどうだったのかは分からないですが、私が話を聞いたことのある限りでは、彼ら彼女らは動画を加工したり音楽を挿入したりするためにTikTokを使い、撮った動画は記念写真のように自分と友達だけで見るそうです。

“大人世代がメディアなどを通して目にすることができる高校生は、ソーシャルメディアを活用して自分の姿を発信したり、ときに問題を起こしてしまったりする姿かもしれません。しかし大抵の高校生、少なくとも私が研究の中で出会った限りは、彼女ら彼女らは(信用できる友人などとの)安全な閉じた関係性の外とはむしろつながりたくない、つながるべきではないと考えていました。Instagram(写真や動画の投稿を中心にユーザー同士が交流するソーシャルメディア)はLINEを教えるほどは親しくない相手とメッセージでやり

こつている……ということとは長らく論じられていますが、ソーシャルメディアの「つながりたいもの」だけつながれる」といった特性や、投稿などの形で社会的な背景や文脈が細切れになったり変質した状態で他者や情報に触れる経験は、意見の対立といった現象よりもさらに潜在的で無意識なコミュニケーション様式や価値観にも影響を与えているのではないか。そのような関心から、さまざまな人のオンライン・オフラインでの他者とのかわりに関する個人的な人生や生活実感を得いながら調査をしています。

現代社会が直面する多くの課題は複雑で答えのないもので、分かりやすく要素分解したり、限られた視点だけで眺めたりすることはできないものばかりです。そして「社会は複雑で他者は多様なのだ」なんてことは、言われるまでもなく多くの人が知ってはいるのではないのでしょうか。私自身も、それを知っていても「分かったつもり」になっ

てしまっているときがきつとあると思います。だからこそ、その複雑さや多様さに体験として触れ続けることが重要なのではないか……ということも含めて、多くの人は知っているはずで、それにもかかわらず現代では多様で異質な存在に触れるリスクの方を大きく見積もらざるを得ないとすれば、それは何・誰の責任なのでしょう。

社会の分断や個別化といった問題意識も、もはや真新しいものではなくなってきました。近頃は他責思考という言葉がソシヤルメディア上でよく見かける気がします。ときにそれは、社会への問いかけを「要は『あの人は得をしていてズルい』『自分を変える努力はしたくない』『つてことだよな?』と個人の損得として分かり

「私」のまなざし 43

ひまわり畑の写真の外側について

写真・文◎若林魁人

大阪大学社会技術共創研究センター



大阪市立長居植物園 ひまわり畑(2025年8月)



ひまわり畑のフォトスポットで『推し活』をしている様子(2025年8月)



都内高校にて、高校生～大学生を対象にオンライン・オフラインでの他者とのかわりに関するワークショップを行った(2025年6月)



インタビュー調査の様子(2024年10月～2025年6月)。写真自体は2025年4月のインタビュー時。

取りするときに使う。もし何かを投稿するとしても、限られた友人にしか見られないようにする。あまり親しくない知り合いとは、会話に生まれる間や表情のような情報を削ぎ落とせるからテキストでのコミュニケーションがむしろよいこともある。などなど。

もはや「デジタルネイティブ世代は“大人”世代に比べると、オンライン上で積極的に交友を広げたり自分の顔などをオンラインに公開したりすることに抵抗がない」といったイメージは古いものとなり、むしろ現在の高校生たちには「自分を開示すること、まして自分の制御できない形で異質な他者に触れる／触れられることはリスクの方が大きい」という前提が“大人”世代以上に共有されているように感じています。

そして、ときにそれはメディアリテラシー教育の賜物などでもなく、“大人”世代がインターネット上で論争を繰り広げたり、予期しない形で誰かの文脈が切り取られて炎上させられたり、といった様子を見ることを通して、現代社会に合わせてアップデートした“合理性”のようでした。もちろん、彼女ら彼女らが異質な他者との出会いに価値を感じていないというわけではなく。ただ、オンライン・オフラインを問わず、異質な他者と出会うことはコストやリスクの方が大きな時代になっ

てしまったのかもしれませんが。私 はトヨタ財団より支援いただき「ソシヤルメディア空間がもたらす」かわりの全体性”の希薄化に関する研究」という題目で研究を行っています。ソーシャルメディア上では意見の対立による分断や情報の偏向などの問題も巻き起

やすく分解するために用いられているように思えます。

一方で、そのようなソーシャルメディアにいるのはもはや“大人”世代ばかりなのでしょう。その上でこれからの未来をつくる世代の子どもたちも、意識的、あるいは無意識に、そのような既存の価値体系に合わせた“合理性”を持たざるを得ない場面もあるかもしれません。もしそうであるとすれば私たちの責任のひとつは、彼女ら彼女が、社会の課題やそこにある他者の苦しみを“他人の自己責任”のせいにしないくらいの想像力や、自分とゆるやかにつながる世界に目を向ける楽しさを持ち続けることが“損”にならない社会を少しずつ目指すことではないかと考えています。

8月の植物園はひまわりが見所と宣伝されていたこともあり、ひまわり畑が特別に混雑していました。とはいえ多くの人はひまわりだけを見て帰るでもなく、園全体が普段より賑わっていました。現代は流れてくる情報も考えなければならぬ課題も多すぎて、全てに触れることは叶わない。それでも、ひまわりを見に行ったりついでに植物園を歩き、スイレンやサルズベリや自分の頭の外側の植物にも目を向けられるくらいの豊かさは当たり前

に持ちうることに希望がある気がしています。それはそれとして、私個人の損得勘定の感情としては散歩道の植物園は空いている方が嬉しい

です。◎若林魁人(わかばやし・かいと) 2023年度特定課題「先端技術と共創する新たな人間社会」助成対象者。助成題目「ソシヤルメディア空間がもたらす「かわりの全体性」の希薄化に関する研究」



今号の一冊『フューチャー風土』

風土概念を見直し地球の未来像を探る

● 太田和彦（南山大学総合政策学部 准教授）

2018年度（特定課題）先端技術と共創する新たな人間社会「人間と計算機が知識を処理し合う未来社会の風土論」（代表者：熊澤輝一氏）の成果物として発行された書籍について、太田和彦氏に書評をいただきました。



●書名：フューチャー風土——ひと、いきもの、思考する機械が共存する未来

●編者：寺田匡宏
●著者：熊澤輝一ほか
●発行：京都大学学術出版会
●価格：9,900円(税込)

本

書は風土論を、人間中心主義を超えた視座へと更新することを試みた意欲作である。七九二頁の分量は、本棚で確固たる存在感を放つ。目次だけでも六千文字あり、手を出すのは容易ではないように思えるが、本文は軽やかで、論考と小説と漫画と写真が交錯する。内容はもちろん充実しており、和辻哲郎の風土学史からパンサイキズム、バイオセミオティクス、AI、ブロックチェーン、さらには火星探査にまで話題は及び、「風土」という語でイメージされるものの射程が一気に広がっていくのを感じることができる。

実

際、本書の序章のタイトルは「風土」をアップデートする」であり、その構想の方向性は「非人間」学的考察（六頁）と述べられる。これは和辻哲郎の『風土』（一九二五）の副題「人間の考察」を本歌取りしたものだ。つまり人間を論じるものとしての風土から、「ひと」、いきもの、思考する機械の共存（coexistence）（本書副題）を論じるものとし

て風土概念を見直すことが、本書の目指すところである。マルチスपीシーズ人類学、アクトネットワーク理論、人間以上の人文地理学などを理論的枠組みとして参照しつつ、人間・動植物・気象・モノが結び目を成す複合主体という視点は、「主体としての人間／客体としての自然」二分法とは別の視座を示そうとした和辻やオギュスタン・ベルクの風土学の道筋と重なっているため、突飛なものではない。むしろ、従来の風土論に寄せられる、①決定論・本質主義に陥りやすい、②文化論に偏り自然科学の知見と接続しにくいという二つの批判点に取り組み、風土を気候・地形・生態系・生活実践の交差点と捉え直し、超学際的な連携に資する土台としようとするならば、この「非人間」学的考察への方向性は必然的なものといえるだろう。

さ

て、本書の特異さは、学術論文とフィクションを並べた編集方針にある。理屈で理解しきれないものを感覚で補完させる

THE TOYOTA FOUNDATION
トヨタ財団
ジャーナル
October 2025



INFORMATION

2025年度特定課題公募開始のご案内

ト

ヨタ財団では9月より「先端技術と共創する新たな人間社会」「外国人材の受け入れと日本社会」「人口減少と日本社会」の3つの特定課題の公募を開始いたしました。

先端技術と共創する新たな人間社会

未来を見据えた議論を積極的に展開し、先端技術と共創する社会を描く、独創的で野心的なプロジェクトを募集します。

【募集概要】

「公募期間」2025年9月10日（水）～11月28日（金）
「助成金額」総額4500万円
・共同研究プロジェクト…4000万円程度（500～1000万円程度／件）

・個人研究プロジェクト…500万円程度（100～200万円程度／件）
「助成期間」2026年5月から1年、2年または3年間

外国人材の受け入れと日本社会

「外国人材が能力を最大限発揮できる環境作り」等の5つの助成分野を設定し、外国人材受け入れの総合的な仕組み構築への寄与が期待できる調査・研究・実践プロジェクトを募集します。

【募集概要】

「公募期間」2025年9月1日（月）～11月15日（土）
「助成金額」総額5500万円（500～1000万円程度／件）
「助成期間」2026年5月から2年または3年間

人口減少と日本社会

これまでのさまざまな対応・対策の効果や意義等を掘り下げてレビューし、それに基づいて人口減少の緩和、人口減少下における日本社会のサステナビリティに関して考えるプロジェクトを募集します。

【募集概要】

「公募期間」2025年9月10日（水）～11月11日（火）
「助成金額」総額4500万円（500～1000万円程度／件）
「助成期間」2026年5月から2年または3年間

研究者公募のご案内

ト

ヨタ財団は東京大学未来ビジョン研究センター（FE）と協働し、研究助成プログラムの新テーマ「つながりがデザインする未来の社会システム」のもと、社会システム変革に向けた研究に取り組む研究者を長期雇用し育成する協働事業プログラムを2021年に発足しました。

研究者に安定した研究活動の場と、学内研究者らと共に研究を行う機会を提供することにより、超学際的（transdisciplinary）研究をリードする高度な人材の育成を目指しています。

社会システム変革に向けた明確な課題意識と能力、意欲を有し、柔軟で新規性に溢れた発想に基づく研究活動を積極的に展開する研究者を一般公募します。社会人経験者の応募も歓迎します。

【募集概要】

「公募期間」2025年9月16日（火）～11月4日（火）

トヨタ財団ウェブサイト
toyotafound.or.jp





特集の主催で赴いた東栄町にある楽善王神社の
天井画。[Y.N.]

【編集後記】

EDITOR'S NOTE

● 先日出張で久しぶりにＪＲのローカル線に乗ってきました。今号の特集で掲載している愛知県東栄町に行った帰りに豊橋までＪＲ飯田線を利用したのです。溪谷沿いの美しい景観もさることながら、長篠の戦いで有名な本長篠駅や、その戦いの主役の一人である鳥居強右衛門にちなんで付けられたとも言われる鳥居駅など、歴史好きの私としてはたまらない魅力のある路線です。

東栄から豊橋まで約１時間半、ローカル線ならではの体験もできました。「切符は列車に乗ってから買う」「ドアは自分でボタンを押さないと開かない」などは「ローカル線あるある」で予想はしていましたが、乗降口のところに整理券発行機があるのは初めて見ました。ところが、席に荷物をおろしてから発行機のところに行ってみると、整理券の発行口が閉じてしまっていました。「しまった。乗るときにすぐに取らないといけなかったのか」とあせっていると車掌さんが来てくれたので聞いてみると、「私が切符を発行するので整理券は不要です」つまり車掌さんが同乗している列車では整理券は使わないため、常に整理券発行口は閉まっているとのことでした。

そうこうしているうちに列車は終点の豊橋駅に到着。ここから名鉄に乗り換えるのですが名鉄の

ホームへの行き方がわからず、うろうろしていたら何と飯田線のホームのすぐ反対側が名鉄のホームでした。私鉄とＪＲが同じホームを共有しているという、東京ではあまりお目にかかれない光景は、妙に新鮮でした。

ということ、不勉強な私にとって発見の多い今回の出張になったわけですが帰りの新幹線からはすべてスマホで乗り降り、何か味気無さを感じてしまったのは気のせいでしょうか。[N.K.]

● ● 我が家の夏休みは今年も大忙しでした。小学３年生の娘と、その親である私にとって、夏休みは学校の勉強を離れてやりたい学びや遊びを追求できる貴重な期間です。娘は小学１年生の夏から自由研究でクモの観察を行っています。今年も１学期の理科でカイコの飼育を行ったこともあり、「カイコの糸とクモの糸の比較」を行いました。どうしてカイコの糸はシルクとして広く活用されているのに、クモの糸は布などに活用されていないのか、不思議に思いませんか？

トイレットペーパーの芯にクモの糸（べたべたしない縦糸、それも一番外側の丈夫な枠糸のみ）を巻

き取って輪っかにしたものなどのくらいの重さをぶら下げられるのか調べたり（６リットルのペットボトルをぶら下げてもちぎれない驚異の強度でした！）、虫取りあみや金魚すくいのポイの枠にクモの糸を貼り付けてみたりして、いろいろな角度からクモの糸を観察しました。知れば知るほど興味をそられるクモ。たった一匹でどうやって誰にも教わらずにあんなに大きくて精緻な網を張ることができるのでしょうか。クモを見つめ、蚊にさされまくった夏休みでした。[N.O.]

● ● 父方の宮城の祖父母は早くに亡くなっており、母方の祖父母が東京に住んでいた私には、帰省する「田舎」がありません。先日特集の取材で愛知県北設楽郡の東栄町を訪れ、自転車で見学して回ったのですが、山、溪谷、稲刈り直前の田んぼなど、誰もが想像する「田舎の夏休み」の風景が広がっているのずとノスタルジーを感じ、夏休みの帰省を疑似体験できて良い思い出になりました。視察のために「尽力くださいました地域問題研究所の皆様、東栄町観光まちづくり協会の皆様、ありがとうございます。[Y.N.]

FOR THE SAKE OF GREATER HUMAN HAPPINESS

JOINT

本誌送付先の変更等がありましたら、右のQRコードを読み取ってお知らせください。



JOINT [ジョイント] No.49

発行日 2025年10月21日
発行人 山本晃宏
編集 トヨタ財団 広報グループ

発行所 公益財団法人 トヨタ財団
〒163-0437東京都新宿区西新宿2-1-1
新宿三井ビル37階
[TEL] 03-3344-1701
[FAX] 03-3342-6911
[URL] <https://www.toyotafound.or.jp/>

編集協力 石井 泉
デザイン エディション・ヌース
印刷 文唱堂印刷

本誌掲載の記事、写真、イラスト等の無断転載を禁じます。

On The Journey

—旅の途上で—

世界で2番目に美しいと言われるというフェノシアイスの書店。元は劇場だった建物をうまく再利用しています。
● 写真撮影：新出洋子





公益財団法人

トヨタ財団

THE TOYOTA FOUNDATION



公益財団法人トヨタ財団ウェブサイト
<https://www.toyotafound.or.jp/>



UD
FONT

